

---

# とある一方通行とバイオテクノロジー

ミスターサー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある一方通行とバイオテクノロジー

### 【Nコード】

N7282P

### 【作者名】

ミスターサー

### 【あらすじ】

とある男はいつの間にか別世界の都市、学園都市という都市内に居た

彼の名は風祭 真 かざまつり しん

身体に人体の細胞手術によりバツタの生命力と戦力を身に付けた

ただ…人外の者になってしまった悲しい人である

哀しみと愛を背負った男がこの学園都市に來た理由とは：

哀しみと愛を背負った男が道を歩む時：新たな物語が作られる

## 注意書き

しつこいですがこれは「仮面ライダー」×と「ある魔術の」コラボです

それとグロテスクなシーンがかなり有るかもしれませんがそれでもよかったです…

登場するライダーは仮面ライダー「シン」で学園都市メンバーが主に一方通行、打ち止め、美坂妹が主に出てきます

それとこの作品はNOS初めての作品です  
なので書くスピードはたぶん遅いと思います…そこをご承知してください

ちなみに誤字脱字が有ったら教えてください

では、「とある一方通行とバイオテクノロジー」を暖かく見てください

## 風祭 真

とある男は霧の中を歩いていた

彼は風祭真：バッタの生命力と戦力を細胞手術により植え付けられ、もう一つの姿になると人間の約十倍の運動能力を持っている

風祭「ここは…何処だろうか

歩いていると歳が若返ってる感じがする」

彼、風祭は二十年前に「財団」と呼ばれる組織を崩壊させ亡き、愛する女性と間にできた子供を育てていた

その子供も二十歳になり一人立ちし、自分は勤めていた会社を辞めて旅行に来ていて森林浴をしていたのだが

風祭「参ったな…迷った」

そう彼が言う通り、霧のせいで迷っていた

しばらく歩くとベンチと自動販売機が有った

風祭「…何故森に？」

風祭はそう言うがたぶん近くに村が有るのだろうと思った  
すると携帯が鳴り響く

風祭は驚いた、電柱や電線もない場所である森の中に携帯が鳴り響く

くのはオカシイからである

風祭はおそろるおそろる携帯に手を伸ばし、コールボタンを押す

風祭「はい、風祭真ですが」

電話の声「貴方は何のために戦って居ますか？」

風祭「…アナタはどちら様で？」

電話の声「アナタは何のために戦って居ますか

風祭真「いや…サイボーグソルジャー「レベル3」！」

風祭「何故それを知っている!？」

電話の声「…お前は今から別の世界に行き、人を守れ  
それが使命だ…」

風祭「何故俺なんだ!」

電話の声「アナタしか頼めないんですよ…

霧はもう晴れますから大丈夫です

ようこそ…ガガカ…学園都市…ガガカ…に…」

そして電話は切れ、霧が晴れた…

風祭「ここは…都市？」

霧が晴れ、風祭の目の前には森林ではなくビル郡が立っていた

電話の声の主「その世界はバイオソルジャーが造られているからだ  
お前はその抵抗できる力がある…頼むぞ…」

## その男、追われる身

風祭は今、アンチスキルと呼ばれる警備員に追われていた

さて、風祭は悪いことはしていないのだ  
逆に良い行いをした方なのだが

その行いとは、たまたま近くに居た中学生が六人ぐらいの不良に絡まれていて、それを止めさせるように注意し、的を射るような発言したら不良が逆ギレし殴りかかってきて…

まあ…結果は言わなくても解るように風祭の圧勝で擦り傷なかった  
ちなみにその騒ぎのせいでアンチスキルに見つかり、現在進行形で  
逃走している

風祭「なんで来るんだ!?!」

警備員1「当たり前だ!」

警備員2「つか普通に病院送りにするか!?!」

なんか連絡でさっきお前が倒した六人は病院送りになったぞ!」

風祭「なっ!」

風祭真は驚いた、とつくに衰えていたはずの腕力が元に戻っていた  
からだ  
つまり…



風祭（俺は…やっぱり若返ったのか？）

風祭は考えて走っていると二人の女子中学生にぶつかった

「「キャッ!？」」

風祭「す…すまない！」

「すまないじゃないわよ、って速!？」

風祭は一応謝った後、休まず走った

警備員1「おお、ジャッチメントか!ゼエ、ゼエ」

警備員2「ゼエゼエ、ちようど良かった・・・

あの野郎を捕まえてくれ」

アンチスキルの二人は息切れしながら二人の中学生に話す  
一人は短髪で胸が壊滅的にn

「レールガン!」「美坂お姉様!？何いきなり上空にレールガンを  
放ったのですの!？」

美坂と呼ばれた中学生：

彼女の名は美坂美琴、学園都市レベル5の能力者の内の一人

美坂「黒子・・・私、今ね・・・なんか凄い失礼な事を言った神に  
レールガンを撃ったのよ」

黒子と呼ばれたもう一人の中学生に美坂は言った

白井黒子、彼女はレポートを使えるレベル4の能力者でジャツチメントと呼ばれる風紀委員をしている者だ

黒子「そんなことよりアレ！あの男にレールガンを撃ってくださいまし！」

美坂「あの人を殺す気なの！？」

警備員1「殺さないでくれ！一般人だぞアイツ！

おい2！へばってないで追いかけるぞ！」警備員2「ええええええ！」

警備員1「待てええええええええええ！ル○ン三世！」

警備員2「お前、それは言っちゃったらダメだろおおおお！」

警備員1と2は再び風祭を追いかける

黒子「なんでしたの…あれ」

美坂「さあ？」

「ぽっーん」と言う効果音が回りに響き、美坂と黒子はたた突然と立っていた

閑話休題・・・

さてさて時は進み、夜遅く

風祭真はなんとかアンチスキルから逃げたが場所は町の裏不良、スキルアウトと呼ばれる青年がうろついていた

風祭「さて、参ったな」

しかも案の定、風祭はとあるスキルアウトの六人に囲まれていた

不良「アンタ金持っていないか？」

風祭「生憎、金はない…で

お前等はまだ俺を囲む必要が有るんだ」

不良2「もう一つ理由が有ってな…アンタ昼間の六人を倒したじゃないか

アイツ等は能力者だぜ、だから仲間に入りたいのさ」

風祭「ああ…あのナンパしていた奴等か

すまないが学園都市に來たのは今日でな、その能力者とはなんだ？」

不良「ああ？なるほど…なら教えておくぜ

能力者とは脳の開発で特別な能力を持った人間だ

例えばテレポート（瞬間移動）とかそんな者だ」

風祭「レベルは有るのか？」

不良2「あるぜえ、レベルは六段階

俺達みたいに能力が無いのがレベル0

そこからレベル1〜5が有るんだぜ」

風祭「つまり5が最強って訳か、数は多いのか少ないのか」

不良3「レベル5の人数は後者が正しいぜ、ただ最強にもランクと

「いか色々有るのさ」

風祭「なるほど……一番ケンカを売ってはいけない人物は？」

不良4「アンタ質問多くないか！

まあいいか……学園都市第一位の能力者、アクセラレータ一方通行って奴だよ一方通行」

風祭「なるほどな……」

不良「んで俺達の質問」

風祭「いいぞ」

不良「アンタはどうやって能力者に勝てたんだ？」

風祭「……？ぶん殴るだけだ」

不良達「なんじゃそりゃアアアアアアアアああああ！」

風祭「いやだから本気でぶん殴っただけ思いっきり」

不良「ぶん殴るだけなら問題ない！

お前等いくぜ！」

不良達「おう！アンタも来い」

風祭「はい……？」

閑話休題

最終的に・・・

昼間の警備員1と2に見つかりお縄についてしまった不良達と風祭であった

風祭「・・・ま、野宿しなくていいし

飯もなんとかなるから得したと思えば良いか」

と風祭はこう小さく呟いていた

同時刻、とある場所にある手術室にステッキを付きながら白髪青年が歩いていた

その青年の前には人間と思えない狼の怪物が立っていた

白髪「なるほどア、身体をイジクって化け物ンになったか」

怪物「ガアアアアア！」

怪物は白髪の青年に飛び付き喉を引き裂こうと跳ぶが白髪の青年は首に着いた機械をいじくり、こう言った

白髪「ベクトル変化」

狼の怪物は白髪の青年に触れると吹き飛ばされ壁に突っ込んでしまった

さすがに狼の怪物・・・サイボーグソルジャーレベル2  
試作品名ウルフサイボーグソルジャーも驚きを隠せない

白髪「さア、ここからはア・・・一方通行だ！」

白髪の青年はステッキを手放しウルフサイボーグに手を伸ばす

ウルフ「！」

ウルフは身を退いた、何故なら白髪の青年が自分と同じ化物に見えたからだ

ウルフ「ヒঃウアアアアア！」

ウルフは逃げた、本能が理性をぶち破ったからだ  
だが白髪の青年はまた、こう言った・・・「ベクトル変化」と

次の瞬間にウルフは弾けてバラバラになり

そして手術室が緑色の血が壁、棚やらあちこちに付着したが白髪の青年は血が着かなかった

そして白髪の青年はステッキを持ち、首にある機械をいじくった後、そのままステッキを突きながらその場を離れて行った

白髪の青年の名は「一方通行」

学園都市第一位の能力者であり

自称・・・悪人である

## 一方にある真(まこと)

前回拘置所に送られた風祭

彼はスキルアウトと偶然に居ただけなのに問答無用で送り込まれたちなみに前回の不良達は家で自宅謹慎になったが何故か風祭は帰してくれない

風祭「あの…いつまで居ればいいんです？」

前回の警備員1が見張りの時に風祭は言った

警備員1「知らん、ちなみに下手したら学園都市から追放だな」

風祭「追放ですか、それはヤバイなあ」

警備員1「だったら大人しくしとけ」

風祭「はあ・・・」(汗)

一方通行「ーと言う訳だ」

「にゃー、大変な奴が出てきた訳だにゃー

まさか拳銃は効かない怪物が出てきたのは俺達、レベル0にとっては不公平な話にゃー」

一方通行と面を向けているアロハシャツを着て、サングラスを掛け、

金髪が特徴の青年「土御門つちみかど 元春もとはる」はため息を吐く

土御門「一応、警備員達に「怪物が出てきた場合は退かせた方が良  
い」  
って伝えた方が良いかも知れないな」

一方通行「オイオイ、本気なンですかア土御門先生え？」

土御門「当たり前だにゃー、警備員達は教師で構成された集団、能  
力は皆無にゃ  
無駄に多い犠牲を出してもダメだから、出てきた瞬間に風紀委員達  
に戦闘を任せた方がいいほうだと」

一方通行「・・・一応、オレの知り合いが警備員の家に居候しテる  
からなア  
伝えたてやるよォ・・・、だが期待すンなよ・・・  
アイツ結構、石頭だからな」

土御門「そりゃ、ありがたい  
頼んだにゃー」

二日後



風祭「暇だ・・・」

警備員1「ふぁ」

風祭「デカイあくびですね」

警備員1「こないだ夜遅くに変死体が発見され、見に行ったんだよ  
現場検証やら色々やっていてな」

風祭「どんな死体だったんです？」

警備員1「ああ…血が緑色で身体がバラバラ  
顔が狼なんだよ」

風祭「！、その話を詳しく！」

警備員1「は・・・？ダメだ！これ以上言ったらクビになっちゃう  
！」

風祭「そうですね、アハハ」

風祭は考えた、サイボーグソルジャーがこの学園都市と呼ばれる都  
市にいる

また「あの悲劇」が起きた、絶対にやってはいけない「あの悲劇」を

風祭「脱獄するか…」

警備員1「ん、なんか言ったか？」

風祭「あ、いえ・・・独り言です」

警備員1「そうかい」

風祭「あ、今度は学園都市のパンフレットを持ってきてくれませんか？」

警備員1「ああ、いいぜ」

風祭はそう聞いた後、腕立て伏せをした

一方、とある学校で話し合いが行われていた

「待ってください！新しい先生をまた入れるんですか！？」

ピンク色の髪をして、童顔、しかも身長が低く過ぎて正に小学生に見える

・・・が実は成人で先生をしている「月詠小萌<sup>つくよみ こもえ</sup>」

「確かにその通りじゃん！！」次に声を上げたのは抜群のプロモーション<sup>みかわ</sup>で大人の美女だが服装が冴えない緑のジャージ姿をした「黄<sup>よ</sup>泉川愛穂<sup>あいほ</sup>」である

「ですが統括理事会の理事長が決めたのです」

きつい顔と巨大な身体、ゴリラみたいな生活指導担当「災誤<sup>さいご</sup>」は言った

災誤「とりあえず、小萌先生はあの先生にその事を伝えてください  
黄泉川先生は彼を迎えに行ってください」

黄泉川「はぁ・・・わかったじゃん」

黄泉川は素早く歩き、文句をブツブツ言いながら職員室から出ていった

それを見た災誤は生活指導室に戻った

小萌「え・・・私、一番面倒な仕事を押し付けられたような？」

その場に残った小萌は首を傾げて、自分のクラスの副担当の先生の元に向かった  
ちなみにその先生は小萌の話を聞き、数分後「だいたい分かった」と言った

小萌（心配だなぁ・・・）

それを聞いた小萌はそう思ったと言う

## 留置場

警備員1「おい、釈放だ」

風祭「え？」

風祭は驚いた、「どうして釈放なのだろう」と思ったぐらいだ  
確かに身元保証人が居ないのに釈放する警察や警備員が何処に居るのだろう

警備員 1 「理事会の理事長が釈放しろと命令が来たんだよ」

風祭 「ですが、そんな上手い条件をタダでくれませんかよね」

警備員 1 「正解、とある高校の先生と警備員になれとさ」

風祭 「わかりました、行きましょう」

警備員 1 「オイオイ、即答かよ」

風祭 「ここに居るよりマシです」

警備員 1 「・・・なるほどな」

風祭が外に出るとサングラスを掛けた黄泉川がタクシーに乗っていて、玄関前に居た

黄泉川は風祭が来たのを確認すると窓を開ける

黄泉川 「風祭 真だね、私は黄泉川だ  
迎えに来たじゃん」

風祭 「・・・理事会の使いで？」

黄泉川 「違う、学校からの独断で来たじゃん」

風祭 「これからよろしくお願いします」

黄泉川 「・・・乗るじゃん」

黄泉川は自分と反対側のドアを開け、手招きする  
そして風祭は車に乗り、車は発進した

黄泉川「アンタ、釈放する条件に警備員と高校の先生をやることになっっているじゃん」

風祭「ええ、それが問題でも？」

黄泉川「色々と有るが、一つだけ言う  
アンタ、ここの都市の理事会のメンバーに会ったことは」

風祭「ないです」

黄泉川「だよな・・・」

風祭「えっと今度はこちらが二つ聞いてよろしいでしょうか？」

黄泉川「いいじゃん、じゃんじゃん言ってくれ」

風祭「はい、まず担当教科は？」

黄泉川「それは分からない」

風祭「・・・、もう一つだけ俺は住む所は何処でしょうか？」

黄泉川「・・・」

風祭「あれ、なんか言ってくださいよ  
何かとてつもない不安が」



一方通行「まア、いい」

上条「ところで土御門、お前は何してるんだ？」

土御門「カミヤん、ちょうど良い所に来たにや  
重大ニュースにや」

上条「重大？」

土御門「そうにや、実は一方通行が俺達と一緒にの学校に来るにや」

上条「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんですとおおおおおお！？」

上条は驚きを隠せず叫んでしまった

一方通行「ケツ・・・」

そして一方通行はそれを見捨て、これから行く学校の方に顔を向けた

終  
わ  
り



**一方にある真(まこと) (後書き)**

誤字や脱字、間違いがありましたら教えてください

## **K教師とT教師の出会い（前書き）**

ZERO様の作品『仮面ライダーディケイド 科学と魔術の世界』  
のコラボしました

ZERO様、コラボ許可をいただき誠に感謝致します

## K教師とT教師の出会い

風祭は黄泉川に連れられ来た場所は高校だった  
二人はタクシーを降りるために、割り勘で代金を払ってタクシーが  
去ったのを見た

黄泉川「着いて来いじゃん、職員室まで案内する」

黄泉川は早足で歩く

しかも何故か風祭から距離を置くように

風祭「・・・俺、悪いことをしたかな？」

黄泉川（アイツは理事会が保証人を代わったじゃん、アイツ…一方  
通行と同じ裏の住人かもしれないからな）

風祭「ちよっ、速いです!？」

黄泉川「職員室に着いたじゃん」

風祭「なんか色んな場所を飛ばしたような」

黄泉川「気のせいじゃん、さあ入った入った」

黄泉川はドアを開け、風祭を押し入れた

風祭「うわ!？」

「わざわざ?!」

風祭が大きい声で職員室に入ったせいで一斉に職員達が顔を向ける

黄泉川「皆、注文してくれじゃん!

今日からこの学校の先生と警備員になる風祭真じゃん!

ほら風祭!挨拶しろ!

風祭「え!?!えっと、ご紹介の通り風祭真です

出身校は城南大学です」

先生方「え…ええええええええええ」

風祭「?」

黄泉川「す…すまないけどIQは?」

風祭「えーっと…父が言っていたんですが、250とか」

「……………」

風祭「えっ…と、何か問題でも言いました…か?」

黄泉川「自分で聞け」

風祭「ハァ？」

そして風祭は少しだけキョロキョロと目を動かすところある男に目が止まった

風祭「門矢…士!？」

そこには大シヨツカーの戦いで共戦した男「門矢 士」が居た

士「お前・・・誰だ？」

風祭「あ・・・」

そして場は白<sup>しら</sup>けた

屋上

理由はともあれ、風祭は士を屋上に連れていき、身の話をしようと

風祭「で、デイケイドは何故、この世界に？」

士「!」

士はその一言を聞いた瞬間、風祭を睨み付け身構えた

風祭「そう睨むな、俺は大シヨツカー戦に居たライダーの一人さ」

士「なに？」

風祭「仮面ライダーシン：と言えば分かるだろ」

「ああ、なるほど：な」と納得した様子で警戒を解き、変身道具も懐に入れた

士「で、そのシンがなんでこんな世界に？」

風祭「それは俺が知りたいし、それに『キバの王子』達が使うオーロラも使って居ない」

士「なんだと・・・！？」

風祭「・・・分からないが可能性が二つ、俺が偶然に迷い込んで世界を越えてしまったか  
またはこの世界に俺が必要だったから・・・のどちらかだろう」

士「・・・とりあえず、今は土曜日の昼だ  
俺は帰って寝る」

風祭「え？仕事は？」

士「別に気にすることじゃない、昨日の内に終わらせたからな」

「じゃあな・・・風祭先生」と皮肉な口調で言いながら手を振り、  
屋上から去っていった

風祭「・・・なんというか、面白い奴だな」

風祭はその後、職員室に行き、教頭に担当教科（ちなみに生物）と

担当するクラス（ちなみに上条のクラス）、泊まる場所（上条の部屋の右隣）を聞き、仕事もないので日常品を買いに街に出た

ちなみに風祭は別世界の仮面ライダーに頼まれて何度か世界を渡っている、その教訓かカードや現金（最大でも5万）を持ち歩いている

風祭「さてと、日常品は買った所だし・・・

住む場所に行くか」

そして歩いて店出て、買った日常品を手を持ち、店から出ると風祭の足に何かがぶつかった  
そして風祭は下を向くと可愛らしい茶髪でアホ毛のある少女が鼻を抑えて倒れてる

風祭「だ・・・大丈夫かい？」

「大丈夫・・・じゃないってミサカはミサカ悶えて、泣きそうな声を出しそう」

風祭「つまり大丈夫じゃないって事かい？」

風祭は買った日常品を下ろし、ミサカと名乗った少女を立ち上げらせる

ミサカ「うん、そうだよ・・・てミサカはミサカで泣いてみ　だり　ウエク・・・ウエーン！」

遂にミサカ（自称）と言った少女泣き始めた、そして風祭は焦り、

通行人達は風祭に「うわ、最低だコイツ」的な目で見ている

風祭「ゴメン！お詫びにクレープ買ってあげるから！」

ミサカ「本当に？ってミサカはミサカは泣きながら真意を聞いてみたり」

風祭「ああ、ちょうど良くクレープ屋が有るからさ」

と風祭はミサカ（自称）の後ろにある移動販売車に指を指した

## 閑話休題

ミサカ「いただきます！ってミサカはミサカは買ってもらったクレープにかぶり付く！」

風祭「召し上がれ」

今、風祭達は移動販売車の近くに有ったベンチに座っている

ミサカ「ふおうだ！なまえ、きいて」モグモグ

風祭「とりあえず、食って飲み込んでから話さないか？行儀悪いぞ」

ゴクンとミサカ（自称）は飲み込むと風祭に聞いた

ミサカ「アナタの名前を教えて！ってミサカはミサカは聞いてみた」



風祭「名前？」

ミサカ「うん、名前を教えて！あ、私はラストオーダーだよ」

風祭「ラストオーダー…最後の注文？」

ミサカ「違うよ、打ち止めだよ、その理由は・・・言って良いのかな？ってミサカはミサカはアナタに聞いてみる」

風祭「知らんよ、そんなこと聞かれても」

ミサカ「だよね、ってミサカはミサカでちょっと悲しい顔をする」

風祭「まあ、打ち止めちゃんって呼べば良いのかな？」

ミサカ「理由はどうであれ、そのちゃん付けは止めて打ち止めって呼んで、とミサカはミサカでちゃん付けは否定する」

風祭「わかった、俺は風祭真、とある学校の先生をしている  
風祭か真、どちらでも構わない」

すると風祭の目の前に打ち止めの手が出てきた

打ち止め「じゃあ風祭って呼ぶ、ヨロシクね風祭！ってミサカはミサカで手を出して握手を求める」

風祭「ああ、ヨロシク」

風祭も握手するのに動じて自分も手を出して、打ち止めの手を握る

打ち止め「？」

風祭「どうした？」

打ち止め「うーん、なんでもない！ってミサカはミサカで笑顔を見せて誤魔化す！」

風祭「それ・・・誤魔化してないからね」

打ち止め「はう！痛いところを突くね！ってミサカはm「わかった、わかったから」むうゝ人の台詞遮るなー！」

風祭「で、何を誤魔化そうとしたのかな？」

打ち止め「うーんと、アナタの身体から人間と違う何かの電磁波を感じるんだけど？ってミサカはミサカは何故か疑問を訴える」

風祭「ああ、電撃使い系の能力者なんだね

まあ・・・昔、色々有ってね」

風祭は少しだけ寂しい顔をし、自分の手を握った

打ち止め「うーん、訳あり同士で話が合いそうだね、ってミサカはミサカでクレープに食べながら頷いてみたり」

風祭「ハハハ、確かにな」

その後、打ち止めと別れたのち、自分が寝泊まりする学生寮に行く

風祭「あ、お隣に挨拶しないとな  
お菓子持っていくか」

夕方頃に学生寮に着いた風祭は管理人から鍵を貰い、部屋に入り、  
先程買った品の中からお菓子（お菓子といえ、饅頭の詰め合わせだ  
が）を持ち、隣の部屋のドアを叩く

ゴンゴン！

風祭「すみません、隣に引っ越した者なのですが」

「はい、今来ます」

ガチャ：とドアが開き、上条は目の前に居る風祭を見て目をぱちく  
りさせて驚いている

風祭「お隣に引っ越した風祭だ、ヨロシク」

上条「は、はあ？どうも、上条当麻です」

風祭「これ、挨拶の品で饅頭なんだが食べてくれ」

上条「あ、ありがとうございます」

風祭「あ、ちなみに君の学校の教師だから」

上条「ええええ！？」

風祭「じゃ、そういう訳で」

風祭は去ろうとすると上条の部屋から猫の声聞こえ、女の子のが玄関に来た

「ねー、とうまー、お腹空いたー・・・ってそっちの人は誰？」

女の子の服装は正に修道服・・・つまりシスターが着る服装（白）である

風祭「こちらの子は？」

上条「インデックスです、家に居候している子なんです  
深い関係では有りませんからご安心してください」

インデ「ねー、とうまーお腹空いたー」インデックスさんは先程貰ったお饅頭でも食べてください」お饅頭！やったー！」

上条「と、その前に風祭先生にお礼を言いなさい」

インデ「分かったよ！とうまー！  
ありがとう、かざまつり！」

風祭「ああ、よろんでもらえて嬉しいよ、夕食がまだだったら一緒に食べないか？」

引越し蕎麦をご馳走するよ」

上条「え！？そんな悪いですよ！」

風祭「若いのにそう遠慮しなくて良いの、インデックス君も来る？」

インデ「インデックスで良いよ！かざまつり！  
うん、ご馳走になる！」

風祭「そうか、で・・・どれぐらい食べる？」

上条とインデックスは顔を合わせ、量を言うと風祭は驚愕し、声を高く上げた

夕食の時間になり、風祭、インデックス、上条、そして土御門兄妹が居た

土御門（兄）もとい元春は妹の手作りご飯が食いたかったが妹の方、メイド服を着たメイド見習いの土御門つちみかど舞夏まいかが風祭の作っていた、めんつゆの匂いに反応した為に元春の夕食作りは破棄

結果的をめんつゆの味を学ぶ為に妹は兄を説得し、風祭の部屋に来た訳だ

ちなみに風祭は頼まれた量＋ $\alpha$ （天ぷら等の揚げ物）を作り、バテている

それもそのはず、鍋4個分の量を茹で上げ、天ぷらさえも揚げたのだから

舞夏「だ・・・大丈夫か？」

風祭「そう見えるかい？」

舞夏「だよなー」

土御門「なあ、早く食べないかにゃー？  
なんかシスターが物凄くヨダレ垂らして見てるんだけど」

風祭「そうだな、よし！いただきます！」

そう言った瞬間、風祭以外の箸が蕎麦に突っ込んだ

風祭「悪いね舞夏君、上条君」

舞夏「気にしなくて良いよー」

上条「こちらはご馳走になった身ですし  
ゴチになりました！」

舞夏「こっちもめんつゆの作り方を教えてくれた上にご馳走してく  
れてありがとうございます！」

風祭「ああ、気にするな」

ちなみにめんつゆの作り方は前に「天の道を行き、総てを司る男」  
に教えてもらったから出来た物で、本来のお礼はその男にするべき  
だろう

風祭「さてー！」

『ーけて』

風祭は頭に右手を当て壁に左手を当てた

上条「風祭先生？どうしたんですか？」

『助けて！―！』

風祭（やはりテレパシーだ、ここから近いな）

風祭「・・・悪いがちょっと外に行く、君達はここに居て」

風祭は急いでリュックに服を入れ、靴を履き、外に出た

上条「え・・・！？」

上条は急な行動にビックリしたが二秒で我に返り、風祭の後を追うように外に出たが、風祭は外にある廊下の柵を飛び越えて落ち、着地し、走って行った

上条「ここ・・・三階だぞ、あり得ない」

上条はハッ！とする

科学や魔術であり得ないなら自分も出会った事もある  
事実、あの「門矢 士」もそうだった

上条「ヤバイぞ！」

上条は舞夏に留守を頼み、自分は急いで風祭の後を追った

深夜零時に出歩く人は流石に余り居ないだろう

だが今回は違った、異様な人間だった者が一人の女子生徒と思われる壁に誘導していた

彼女は少しだけ病院から抜け出し、外の空気を吸いに行っている間に襲われた

ここで彼女の服装と異様な人間だった者の姿を話しておこう・・・

まず彼女の服装はゴーグルを付け、首にアクセサリーを付け、そして制服を着ている

異様な者はバツタ人間そのものと言えない姿だ

そして異様な人間だった者は女子生徒を殺そうと腕を振り落とした瞬間、何かが横から女子生徒を突飛ばした  
その何かと言うと風祭だった

風祭は女子生徒を庇いながら少しずつ異形から離れた

だが風祭は驚いていた、何故なら自分が変身した姿そっくりのバツタサイボーグソルジャーだったのだから

「風祭先生！何処ですか！」

そして遠くから上条の声が聞こえた

風祭「！！君、さっきの声をした方向に走れるかい？」

女子生徒「ええ、問題ありません・・・ですがアナタが・・・っとミサカはアナタの身を心配します」



風祭「大丈夫、大丈夫だから」

上条「ハァ・・・ハァ・・・先生!!」

風祭「上条君!この娘を頼む!」

するとバツタのサイボーグソルジャーは風祭目掛けて襲いかかった  
しかし風祭は回避し、女子生徒を上条の所に導く

上条「ミサカ妹!?!」

ミサカ「お久しぶりです、とミサカは頭を下げてアナタに挨拶を「  
する前に逃げろ!」上位個体と同じ事をされました」

風祭「ああ、もう!早く逃げろ!!」

上条「そんな!」

風祭はリュックから衣服を出し、バツタのサイボーグソルジャーに  
投げて上手く絡ませた

風祭「仕方がない、近くに離れてろ!」

上条「は、はい!」

風祭（∴変身）

風祭は左手で喉を掴むと衣服は裂け、顔は段々と変わり始め、額に  
は三つ目の目∴『第三の目』が出て、顎はバツタの様に開き、徐々  
に皮膚の色も緑に変わり



シンとバツタサイボーグソルジャーはぶつかった

一方・・・上条達は風祭の変身を見届けた後、とある写真館に来て  
ドアを叩いている

上条「先生！士先生！」

士「なんだよ、今何時だよ」

上条「風祭先生が化物になって・・・化物と戦って居るんです！」

士「！」

士はバイクに乗り、上条から場所を聞き出すとバイクを走り出した

シン「ガッ！」

バツタ「グアー！」

シンとバツタサイボーグソルジャーはお互いに有る武器で戦っていた  
シンが腕のカッターでバツタサイボーグソルジャーの首にある静脈  
を斬るとバツタサイボーグソルジャーはシンの右手首を切り落とす

しかし二人ともそんな傷は直ぐに治ったり、生えて戻る  
そして二人は一回離れ、お互いに構え  
にらみ合いをする・・・

一瞬だけ時が止まり、午前一時の合図とする鐘がなった瞬間

バッタ「ガアアア！」

バッタサイボーグソルジャーが仕掛けて来た

バッタサイボーグソルジャーは高く跳び、腕に付いたカッターでシンの頭上に目掛けて振り落とすが、シンは一回身を引き、攻撃を避けて自分の右手の指を相手の目に刺し、左腕に付いたカッターでバッタサイボーグソルジャーの首を切り落とした  
そして地面に着いた瞬間・・・踏み潰した

シン「スマナイ、痛カッタロ、苦シカッタダロ  
スマナイ、スマナカタ」

シンはバッタサイボーグソルジャーの遺体に布を被せた

シン「・・・」

それが終わった瞬間、地面が揺れ、剣で斬った音が辺りに響く

シン「ナンダ！」

シンはその場から離れ、音がした方に走った

## K教師とT教師の出会い（後書き）

ZERO様、コラボ許可をいただき誠に感謝致します

ZERO様の『仮面ライダーディケイド 科学と魔術の世界』も面白いので是非とも見てください

そして更新遅れて申し訳ございませんでした

## 次回予告

「ハア・・・ハア・・・マサカ、マタ一緒二戦ウトハナ！」

「貴様、一体何者だ！」

「通りすがりの仮面ライダーだ！」

## 次回『K教師とT教師の協力』

全てを破壊し、全てを繋げ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7282p/>

---

とある一方通行とバイオテクノロジー

2011年10月8日14時22分発行